

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	16H06383	研究期間	平成28(2016)年度 ～令和2(2020)年度
研究課題名	マスト細胞活性化症候群を基盤とする難治性炎症性病態の比較動物学的再定義	研究代表者 (所属・職) (令和3年3月現在)	松田 浩珍 (東京農工大学・(連合)農学研究科(研究院)・特任教授)

【令和元(2019)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は、マスト細胞の活性化と病態発現への関与について、亜種解析、難治性炎症疾患モデルを用いた解析、アトピー性皮膚炎とうつ病との関連性解析などを通じて、その全容解明を試みるものである。

いずれの研究項目も進捗が見られ、研究は順調である。特に、未熟児網膜症モデルでの、低酸素により皮膚マスト細胞から放出されたトリプターゼが網膜に到達し、その刺激により血管新生から網膜症に至る機序を示したことは大きな研究成果である。また、トリプターゼの特異的酵素活性測定法を開発し、広く関連疾患やアレルギーのリスク診断に応用を試みている点も評価する。

一方、上記研究成果は、本研究の応募時にある程度得られていたものであることから、今後、本研究による更なる発展を期待する。

【令和3(2021)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	マスト細胞が基礎病態を複雑化させる MCAS を、マスト細胞亜種解析、難治性炎症性疾患モデルの解析、標的分子解析などを通じて酸素誘導性、病原体誘導性、続発性障害の三つに分類する再定義に成功し、当初の目的どおりの成果が達成された。また、詳細な病態解析によって発症機構を解明し、有効な診断マーカー、予防法や治療法を提唱するに至っている。マウスを対象とするだけでなく、ウマに対するアプローチも実施し、多種類の動物を対象とする獣医学領域の進歩に貢献した。今後の論文発表など、研究成果の社会への還元を期待する。